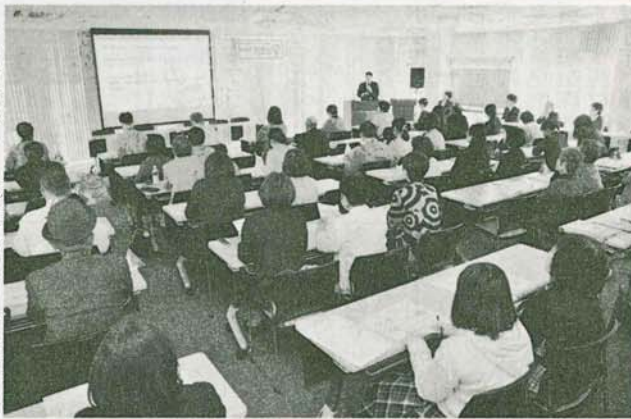


# 「新見で暮らし続けるために」

## 医師、看護師らパネルディスカッション

### 第4回ピオーネシンポジウム

ピオーネシンポジウム「住み慣れた新見で安心して暮らし続けるための地域づくりについて―医療者、住民、ともに考えよう―」(岡山大学医療人キャリアアセスメントMUSCATなど主催)が2日、新見公立大・短大キャンパス内の学術交流センターで開かれた。(桂)



参加者の質問に答えるパネリスト

同シンポジウムは平成29年2月の「医療人が地域に根付くためには」、同年9月の「新見の医療を守るために」、30年9月の「新見で『最期まで自分らしく生きる』ために」に次いで4回目。医療・介護従事者や地域住民ら80人が参加し、初めに新見公立大・短大の公文裕巳学長が「大規模な医療従事者、地域の住民が一体となって考え、その考えを反映した地域づくりを」とあいさつし、池田市長も来賓あいさつをした。

新見市で働く女性医師のキャリア支援、地域医療を担う人材育成などを展開している「ピオーネプロジェクト」の概要説明のあと、県看護協会地域包括ケア推進室の江田純子さん、新見市在宅医療・介護連携支援センターまんとくすの松本信

一さん、訪問看護ステーションくろかみの小郷寿美代さん、地域住民の名越洋子さん(哲西町畑木)、哲西町診療所医師の岡正登詩さんが、それぞれの取り組みや課題を発表。人材不足を背景に地域医療・地域看護に関心をもち、地域看護に専門職のスキルアップ、多職種連携、住民同士の助け合いの必要性を訴

えた。このうち、「子育てで世話になったお返しに」と、平成24年から31年まで母親を在宅介護(現在は施設利用)していた名越さんは在宅介護を続けられた理由として、①診療所医師が不定期でも往診してくれ、急病になった時も素早く対応してくれた、②ケアマネジャーが適切にアドバイスしてくれた、③介護士、ヘルパー、理学療法士、訪問看護師、福祉用具の業者らが相談に乗ってくれた、④家族が協力してくれた。4点を挙げ、「いくつもの制限を乗り越えて、できる限りのことをして今から考える」と大なり小なり悔いが残っているが、「少しは私なりの恩返しができる」という達成感と、各グループが話し合った内容を発表することによって情報共有できた」と述べた。

「住み慣れた新見で安心して暮らし続けるために」をテーマにしたグループワークもあつた。ピオーネプロジェクトは26年4月にスタート。シミュレーションで、病院長や看護師に求め、地域包括ケアシステムに伴う専門職の負担感、口腔ケアについて話した。

岡山会場(岡山大学)を結び、医療従事者のスキルアップを図る遠隔講座を行っている。